



連載

指揮者の
仕事場
探訪

INTERVIEW WITH MAESTRO AT HOME >>>

児玉 宏

HIROSHI KODAMA

取材・文=中 東生
Text=Shinobu Naka
Photo=private

連載9回目は、大阪交響楽団音楽監督・首席指揮者の児玉 宏の仕事場取材を試みました。ドイツのミュンヘン空港に降り立つと、児玉夫妻が温かく出迎えてくれました。マエストロが運転する黒のベンツに乗ると、「仕事場といっても、私には難しい定義だね。書き手が困らないか、読者はつまらなくないか、といろいろ考えて、取材をお断りしようかとも思ったんだけどね……」と、相当お心を砕いて下さったご様子。さて、どんな結末になるのでしょうか。

Carmen

Ab dem 3. Oktober wird Georges Bizets Oper „Carmen“ in der vielgelobten Inszenierung von Christian Pöppelreiter, der auch die Wiederaufnahmeprobe leiten wird, wieder im Großen Haus des Musiktheaters im Revier zu sehen sein. Die musikalische Leitung wird Hiroshi Kodama übernehmen. Hiroshi Kodama ist seit zwei Jahren in Gelsenkirchen. In der vergangenen Spielzeit stand er zum ersten Male am Dirigentenpult im Orchestergraben: er dirigierte mehrere Vorstellungen der Operette „Die Fledermaus“. Das Publikum und die Kollegen waren von der einfühlsamen und mitreißenden Leitung Kodamas begeistert. Neu

im „Carmen“-Ensemble sind auch Jan Hendrik Rootering (Zuniga) und Peter Kovacs (Morales).



Hiroshi Kodama



今回の取材で最初にご案内いただいたビール醸造所ヴァイエンシュテファン



1975年夏のザルツブルクの楽屋にて。ヨーロッパで初めてブルームス「ハイドンの主題による変奏曲」を演奏した後に撮影されたもの

1980年夏に掲載された新聞記事。「感情がこもった児玉の指揮に聴衆も同僚も心を奪われ、感動していた」と書かれている



ein gutes Team...

Foto: Fildt

ヴュルツブルグでの光景(1982年・新聞に掲載された写真)

指揮者の
仕事探

まずは「お客様がいらっしゃると必ずお連れする」という、ミューン郊外の世界一古いビール醸造所ヴァイエンシュテファンへ到着。ミューン工科大学の敷地に囲まれた高台のテンプルでノンアルコールのヴァイスビールを頂きながら本題に移る。「私の仕事場はずっと劇場でした。カラヤン等が「成長する糧が劇場生活だった」と語っていたので、それを体験したいと思い、渡欧したのです。」

まずはベルリン国立歌劇場(東ドイツ)で、音楽総監督のオトマール・スウィトナー氏の下、沢山の事を学びました。特に印象深かったのは、「ニールンベルクのマイスタージンガー」の公演で、第3幕の〈優勝の歌〉を指揮しながらスウィトナーがブワツと立ち上がった時のことです。オーケストラの音もブワツと膨らみ、音楽はより活気を帯びたけれども歌い手の声が聞こえなくなりました。当時はその行動の意味が理解できなかったのですが、ずっと後になって自分なりに納得がいきました。実はこの時、歌手の調子が悪く、やっとたどり着いた大きな山場だったから、スウィトナーはその歌手の綻びが目立たないように、オケの音量でカバーしたのでしょう。後日、「興奮して間違えたことにすればいいだろう?」と答えたスウィトナーこそ、劇場を仕事場とする究極の指揮者です。「ドイツを渡欧先に選んだのは、どうせなら大好きなR・シュトラウスの同郷人に「才能がない」と言われたかったからです。その後、デュッセルドルフ・ラインドイツ歌劇場、ゲルゼンキ

ルヘン市立歌劇場、ヴュルツブルグ市立歌劇場、ミュンスター市立歌劇場と移り、デュッセルドルフとは再契約を交わしました。2回目は通常契約期間の倍の契約を結び、スタート地点からの成長過程を自分で確認することができた意義深い8年でした。それからバイエルン州立コーブルク歌劇場に移っても、常に劇場が仕事場であり続けたのです。朝出勤し、お昼休みに数時間家へ帰り、夕方から夜の11時頃までずっと仕事場におりました。週末という概念すらなく、毎日がその繰り返しでした。」

そんな中で、前述の経験が児玉氏の血となり肉となっていたことが証明されたエピソードもある。「メリー・ウィドウ」に音楽稽古なしで入った代役が、指揮者を無視して暴走し、手に負えなくなった児玉氏は、その歌手の動きが見えるようにコンサートマスターを立てさせ、指揮者なしで伴奏させ乗り切ったという。終演後、適切な判断だったと、その怖そうなポーランド人のヴェラン・コンマスに褒められたそうだ。また、初めて振ったモーツァルト「ドメネオ」のある公演で「神のお告げ」役の歌手が劇場に来ていなかったというハプニングが起こったが、咄嗟にオケに2倍速で弾いてもらい、その不在を目立たせないように解決させたこともあるそうだ。

そうした26年に渡るドイツの劇場生活とは、2001年8月31日に別れを告げた。

「それは、車を替えるようにハコ(劇場)を替えても、やっていることは同

じになったからです。昔のような劇場育ちの音楽家がいなくなってきたので、説明しても分からない人を相手にするよりも、自分の時間をもっと大切にしたいと思うようになりましした。私は起承転結という言葉が好きなのですが、私の人生の「転」の時期が来たのです」

そうして仕事場はライプツィヒの市立図書館に代わった。年間16ユーロで一度に50部まで借りる事が出来るこの図書館は、最上階全部が音楽に充てられ、印刷の街ライプツィヒならではの充実した蔵書を誇る。そこに籠って、埋もれた名曲を発掘する仕事から、あの有名な『ディスカヴァリー・シリーズ』が生まれるのだ。

「音楽は音楽家を必要としていない。書かれた曲は、例え演奏されなくても、そこに存在し続けるからです。音楽家こそが音楽を必要としているのです。いつも同じレパートリーを演奏して、聴いて、それで満足していたら音楽する意味がないと私は思います。もっと聴くべき名曲は沢山埋まっているのです。現在では難しく演奏者が見つからないような曲もあるので、発掘する曲の選択・吟味には膨大な時間をかけています。平均すると、1000冊読んで、10冊あたるかどうかが、といった割合です」

このライプツィヒに、1年のうち60%ほど滞在し、残りの40%はミュンヘンと日本、半々くらいの割合だというが、今回の仕事場訪問には、住民票のあるミュンヘンにお招き頂いた。ミュンヘン郊外の静かな住宅地にある御宅

は「何も無い所」だそう。グランドピアノとPC関係の一角、オーディオ関係の一角と蔵書。楽譜はデータにして持ち歩いているので、行く先々どこでも「仕事場」になるのだという。

「演奏する機会がないと音楽家でなくなるのではなく、演奏しなくても、指揮棒を振らなくても音楽家であり続けることができる。そう悟ったら楽になりました。音を出している事を、自発的なものになりたい。そのために色々な事を模索して過ごします。その仕事に特定の仕事場は必要ないので」

例えば『フィガロの結婚』の調性の統合性、『アルプス交響曲』が受難の物語だという信憑性の高い仮説、モーツァルトの意味など、興味深い洞察が次から次へと披露され、将来のコンサートテーマなど話は永遠に尽きない。

「私を知る限り、独語だけがMusical Note、「音楽」を動詞にできます。名詞の「音楽」を動詞にすることによって、主語が生まれ「誰が」という主体ができます。その『誰』が社会の中でどのような存在であり得るのか、「自分と社会」「自分と音楽」に着眼しながらMusical Noteしたいのです。そして、音楽を利用するのではなく、音楽のために生きてたい」

8時間に及ぶ今回の仕事場訪問は、結局「彼がいる場所はどこでも仕事場になり得る」という結論に達した。読者の皆様もコンサートにお出掛けになり、そこで展開される「仕事場」を訪問してみてください。

PROFILE

児玉 宏 Hiroshi Kodama

大阪交響楽団 音楽監督・首席指揮者。桐朋学園大学音楽学部、作曲理論学科、指揮科卒業。齋藤秀雄、小澤征爾両氏に師事。1975年に渡欧、東独ベルリン国立歌劇場音楽総監督だった故オトマー・スウィトナー氏の下で研鑽を積む。26年以上におよぶドイツ歌劇場での豊富な経験に裏打ちされた、格式高い演奏、特色あるプログラムは高い評価を得ている。大阪響とはディスカヴァリー・シリーズを企画、5タイトルのCDを共同制作している。これまでに新国立劇場、二期会でのオペラ公演の他、札幌、東響、都響、東フィル、東京シティア・フィル、神奈フィル等と共演。2008年4月より現職。ミュンヘン在住。



ミヤスコフスキーの楽譜。スターリングラード戦の真っ最中の真冬に演奏されていたことが証明されているミヤスコフスキーの楽譜は、人類にとっての音楽の存在意義を確信させる宝物



ライプツィヒの市立図書館

【公演情報】
大阪交響楽団
第85回名曲コンサート「春への誘いブラームス」
 <日時・会場> 2015年2月11日 13時30分・17時 / ザ・シンフォニーホール (共演) 奥村愛 (vn) (曲目) ウェーバー「オベロン」序曲、メンデルスゾーン「ヴァイオリン協奏曲」、ブラームス「交響曲第2番」
第192回定期演奏会「ヘンリー5世」～魅力再発見・ピアノ協奏曲④
 <日時・会場> 2月18日 19時 / ザ・シンフォニーホール (共演) 田部京子 (p) (曲目) ウォルトン「組曲「ヘンリー5世」」、ジョゼッペ・マルトゥッチ「ピアノ協奏曲第1番」、グラスノフ「交響曲第7番「田園」」 (問合せ) 大阪交響楽団 072・226・5522
神奈川フィルハーモニー管弦楽団
第312回定期演奏会みなとみらいシリーズ
 <日時・会場> 9月20日 14時 / 横浜みなとみらいホール (曲目) モーツァルト「交響曲第39番」、ブルックナー「交響曲第4番「ロマンティック」」 (問合せ) 神奈川フィルハーモニー管弦楽団 045・226・5107